

ふもだか

(昭和六〇年度放送文学賞受賞作)

# 沢瀉の紋章の影に

(第一回)

吉田紗美子

はじめに

俗に「長州藩」とよばれる毛利氏の封土は三十六万九千余石。

そのなかに三つの支藩があった。

長府毛利氏—四万八千石

清末毛利氏—一万石

徳山毛利氏—三万石

ほかに、岩国吉川氏—六万石があったが、ここは特殊な立場にあって支藩と呼ばない。

支藩は、萩毛利氏を、御本家もしくは宗藩とよんだ。

支藩は、萩毛利氏の「臣下」である一面、任官、叙位、参勤交代など、幕府でうける待遇はすべて、他の独立した藩と同格のものである。その立場は複雑微妙であった。ことに他の二支藩と異り、独立意識の強かった徳山は、過去に宗藩の手で取り潰されたこともある。

徳山はその長い歴史を、ある息苦しさをもって生きた藩でもあった。

徳山。

現在の山口県徳山市である。

一 仲継ぎ

安政三年十月のある日、徳山では、お納戸役・熊谷主税が切腹した。

その日はおだやかに晴れた晩秋の一日で、青く澄んだ空のもと、徳山の城下のうしろに聳える山々も、城下の前にひろがる瀬戸内の海も、枯草色のやわらかい陽射に包まれて息づいていた。

児玉半九郎は、いつもの時刻に蔵本くらもと（雅やかにいうと、藩政府である）から退り、横本丁よこほんちようの自分の邸にかえってきた。表二十間入二十五間の南むきの邸である。供の松蔵の「おかえり」のふれに、ひさ、のぶ、跡継ぎの百合若と三人の子供たちが、すぐ式台まで迎えにでた。半九郎は格子門を入り、夕陽をうけて前庭をあるいてくる。

四十六才。馬廻役。百石とり。小柄だが、眼の配り、姿勢、歩きぶり、すべて端然と見事である。

半九郎は三人の子供にうなずいてから、妻もとの顔がないのをたしかめた。若い日、この児玉家に養子にきたばかりの半九郎に、新妻のものは「豆を煮ておりましたゆえ、お出迎えに出られませなんだ」と告げ、そのけろりとした言い草に、む、わしより煮豆のほうが大事か、と、半九郎がおもわず気を吞まれて以来、もとの出迎え省略は公認になってしまった。

松蔵が着替えなどの世話をすませて退ったあと、ひさが茶を運んできた。湯吞を半九郎の前においてから、ひさは沓脱石の

ほうに目をやり、手をのばして草履を穿きやすいようにならべかえた。半九郎は一服したのち、庭へおりて盆栽をみにゆく習慣がある。

ひさは縁側に指先をついて、

「大変なことでございましたね」

と、半九郎に話しかけた。

ひさは袖の振り裏の赤さが匂いたつ十六才の娘盛り、親ゆずりの小柄だが、色白の顔にはっきりした瞳がきらきら輝いていて、いかにも利発な、という印象をあたえる。「家では今日、その噂でもちきりでございました」とひさは続けていったが、半九郎は答えなかった。

半九郎は、巨とか大とか、やたら誇大な表現をするこの節の軽薄な風潮を好まない。「大変」など、滅多にあらうはずがなく、たとえて言えば「幕府倒る」「この神州の一隅がメリケンの艦隊に占拠さる」など、有り得べからざる事態の出来したとき、それをこそ「曠古の大変」と称するのであって、大方のことは、「変」、いや、「事」にすぎぬ、と考えている。

だいたい、この夏の早の際も、人は「未曾有の」とさわいだが、半九郎の記憶によれば過去、より烈しかった早魃はいくらもあり、几帳面な彼は相手の発言をきくたびにいちいち訂正せねば気がすまず、そのことで相手がどんなに鼻白んだ表情になっても、彼は恬としていたものである。

「いったい、何があった、というのじゃ」

半九郎の不機嫌な声音に、ひさはおどろいて問いかえした。

「では、まだ、お届は出ませぬか」

「届……なんの」

「昨夜おそく、お納戸役の熊谷主税どのがお腹を召されたそうでございます」

半九郎はさすがに顔色を動かし、しばらくの沈黙ののちに、

「で、理由は」

と、ひさの顔をみた。

奥向き御用を勤める主税は、二十五石を頂く律義一途の中年者であった。

はやく妻に先立たれた主税には、跡継ぎの男子がなく、娘が一人いるだけであったが、この、そのという名の娘はいっふう変ったおそろしく気儘な娘で、養子を迎えても親しむことがなかったので、やがて去られてしまった。二度目、三度目もおなじく去って、四度目に主税は頼みこんで近在の百姓の若者を入れたのだが、そのは見下して下男のようにこき使うばかりなので若者も肚をたて、実家にかえると揉めている最中であった。

養子三度まで離別すれば家柄断絶、と藩法は定めている。これまで目こぼしされている主税は進退きわまり、おもいあまっで死を選んだのであろう、と、これはもっぱらの噂でございます、とひさは述べた。

その話半ばから、もう聞くまでもない、というように半九郎は縁側に立っていた。後手を組んで無言で居る。だが、その視線は、庭の、折柄の夕陽の残紅がつくりだす、くろぐろとした物の影の部分にひたとむけられて動かなかった。ひさが夕食を告げにきたとき、半九郎はまださっきと同じ姿勢で、庭の闇にむきあっていた。

## 二

前から、半九郎は世帯方吟味役、いわば藩財政の管理をしている。

政敵富山源次郎用人が政変ののちに放ってよこした職であり、それまで評定役として藩の枢機にあずかっていた彼にしてみれば、たかが金勘定、であったが、律義な彼はだからといってそれを疎かにすることがない。

二日前のこと。

主税が半九郎の御用部屋に入ってきて、酒手形のふりだしをねがいでた。

「また、酒か」

「はっ。さる重陽の節句の折、お部屋さまには菊綿の催しをあそばされましたにつき、在庫分を調べておきたくぞんじます」  
「む。む。しかし、まあ、なんちゅうても当節は、おなご女子もよう飲むのう」

下戸の半九郎はほとほと呆れていった。

なにかといえど女が酒を飲む……、「奥」の酒の消費量がこれほども多いとは、この職につくまで、半九郎のかつて知らなかったことである。

半九郎は、この蔵本の真北、小高い丘の上に白壁をめぐらしている「お館」やかたを思い描いた。主君もとぎみ元蕃の正室は江戸邸住まいであるから、そのお館の奥は、お部屋様とよばれる幾崎夫人が領している。

幾崎は、富山用人が素姓を仕立てて元蕃の側にさしだしたもので、豊満な美人のうえに性質も素直なところから、元蕃の寵が深い。彼女を迎えて奥の空気があかるくなったと買う者も多く、半九郎も、「さよう。嬌声みちみちて、どこやら遊里に似てきましたな」、など妙な同意をしたものであった。

しかし、人の上に立つ者はそれだけ身を慎まねばならない。

江戸邸の正室とおなじ「振舞い」をゆるされている以上、衣裳や髪飾りを京で眺めるなど多少の贅沢はよいとしても、鮎や菓子などしじゅう間食いをする、城下の遠石神社とよしの祭祀芝居には女中ども引きつれ総見せねば気がおさまらぬといった有様、総体にすることなすこと派出はでしく、奥はたちまちのうちに下賤な気風に染まってしまった。

そんな彼女がなにかといえど宮廷風を気取り、曲水の宴の、菊綿のと、家中かちゅうの娘相手に拙い和歌に興じるのほど、半九郎にとって笑止千万なことはないが、笑えないのは、この幾崎の人柄を見抜いた商人たちが争って奥へ出入りしはじめた事実で、これはやがて、どんな形で諸所に撥ねかえってくるか、半九郎にはその照応がはっきり見えているだけ、お部屋様ときいただけで気に食わない。

「なるほど、菊綿よ、のう」

彼は唇をまげて、皮肉につぶやき、

「当藩はたださえ借銀まぶれ、加えて相州駐屯費のうえにこの夏の早じゃ、この秋は半知の馳走かというに、奥ばかりは泰平そのものじゃのう。酒まで飲む……」

ずけずけと言いつ放った。

主税は相槌をうつこともならず、口ごもりながら、ひたすら額の汗を懐紙でおさえている。

なにも其方が恐れ入ることでもあるまいに……と、半九郎はじろりと彼を眺め、まだ盛大に言い募りたい憤懣をおさえて、やおら御用紙を一枚とりあげた。

これは俗に、堅紙たてがみとよばれる。幅二寸ならず、長さ四寸ほどの細長い形から来た名である。

それには、すでに

徳山屋やしき舗入用酒

兎玉半九郎

半九郎の筆でしるしてあり、署名、捺印してある。印肉は公用を示す黒色、印は徳山藩の「徳」の字崩し、である。

日付を裏書する段になって、ふと、彼の手がとまった。

念のために振出先を問うと、食いつまむように半九郎の手元をみつめていた主税は、それとわかるほど狼狽した。

「……国広屋治左衛門、であります」

主税の首筋につうと汗が走ったのと、半九郎の能吏としての直感が閃いたのが、ほとんど同時である。

「国広屋……、本家は治兵衛、分家は大助といったはずじゃ、治左衛門とは何者であるか」

半九郎の語気はきびしくなっていた。

書類の見方にかけては抜群の能力をもっている彼は、下役の弾いたそろばんの数字の誤りなど、まるで誤りのほうから、こ

こ、ここ、と合図してくるのように、一見して読みとってしまふ。まして十家しかない藩出入りの酒造家の名前や扱い高など、じつに整然とあたまに刻まれている。

主税もさすがに下調べはしたとみえて、治左衛門の醸造規模や経歴、奉公人の数や忠勤度など、すらすらと述べてから、「この者は、当藩の大坂御用達、平野屋五兵衛の縁につながる者でありまして、かねてよりお出入り願ひ出ておりましたにつき、ぜひ、この機会に、と……」

そこまで言つて、はっ、と口を噤んだ。

「と、どなたのお指図があつたのじゃ」

半九郎は峻烈にたたみかけた。

主税は脂汗をふきだし、額を畳にこすりつけた。

襖の向こうでは、下役たちがしんとして聞耳をたてている気配である。

「新規お出入りを許す際は、それなりの手順がある。それを知らぬ其方でもあるまい。それとも、あわよくば、このわしを欺き通せるとでもおもうたか」

半九郎は低声になって叱咤したが、主税の鈍重な顔はもう表情を失つていて、こればかりは洩らせぬと思いつめた姿勢であつた。

沈黙のうちに、半九郎は吐息した。

どなたのお指図か、と問いつめるのも無駄なことであつた。

いまの徳山では、利権にしろ獵官にしろ、それを得たいとおもえば結びつく線は二つ。

一は、奥と富山用人。

一は、大坂御用達平野屋と組んだ東東馬とうとうま。

いずれ、治左衛門なる者も、そのあたりに手を廻したのであるう、主税は手先に使われただけ……と、半九郎には読めてき

て、彼は氣をかえて「のう、熊谷」とよびかけた。

「わしは酒は嗜まぬが、五節句をはじめ祝日に君臣相集うて酒を汲みかわす光景は、平和で美しいものとおもつておる。非常の際ともなれば、この手形は真先に廃止されてしまうもの、酒手形の多い時代はいわば事のない良い時代といえよう。記録によれば、七代就馴公の時代にはずばぬけて多い。家臣に酒を惜しまれなんだ殿じゃ、あの時代はよかったと、子供のころからよう聞かされたものじゃが、わしも今にしてしみじみそうおもつておる」

二代前の徳山は、過ぎた名君をいただいて家臣みないきいきと主従關係に励んだ。公もまたみずから家臣との間の風通しをよくなされたものである。

その一つに頻繁なお役替えがあった。上は幕府の老中職から下は小藩の重役にいたるまで、その任期を二年、三年の短期とするのはひとえに腐敗を封じるためであり、その原則を崩し、特定の家臣を長年にわたつて重用すると……水は流れず、不満がたまり、政治は腐つて、と、半九郎のおもいは、徳山の現状にゆきつくのであった。

「まことにさようで。公の御治世三十四年の長いあいだ、家臣に誰一人として、切腹した者、家柄断絶した者がなかつたと、わたくしもきいております」

主税も答え、そんな雑談のうちに、さしたる様子もなく退つていった主税であった。

主税のような貧しい下役が落し穴にはまる過程は古今似たようなもので、養子を迎えねば家が立たず、迎えるにしろ去らせるにしろ近ごろでは、十両、二十両と金がついてまわることをおもえば、主税はかなり以前から音物や饗応をうけており、それは、小心な彼にとって、夜もねむられぬほどの枷であつたであらう。

となりの富山源次郎用人邸で打つのだかな鼓の音が、ふかい樹立を通してひびいてくると、半九郎は苦い顔になつてようやく縁側をはなれた。

食事中も、半九郎は一言も口を利かず、主税のことをおもいつづけていた。

主税の邸は家中の東の外れ、御弓丁西から数えて三番邸、表十二間入二十二間の箬箱ほど細長い敷地にあつた。となりとの

境に樗の大樹があつて遠くからでもそこ知れるが、青葉どきには陰気でありませぬ、と主税はこぼしていたものであつた。今は落葉がさらさらと音をたてて降り注ぎ、棺のような邸を埋めるほど降り積っているであらう……。

### 三

半九郎が倒れたのは、それから数日後の十月十四日である。

その日にはわかにかに冷たい西風が吹きあれ、冬の前触れをおもわせるうすら寒い日となつた。半九郎の帰宅はおそく、暮れた空いちめん、ただならぬ濁つた暗い朱色が拡がっているところであつた。

ひさはすぐ灯を入れ、熱い茶を運んだ。

その日の半九郎は湯呑をとりあげたものの、急に湯気に噓せるような口付きをし、そのまま湯呑を盆にかえた。半九郎の両眼のあたりは動ずんでいる。ひさは、連夜の書き物でお疲れじゃ、とおもつた。

それでも半九郎は、百合若が顔をみせるとかすかに目尻をゆるめた。半九郎は、厄年になって初めて授かつたこの跡継ぎが愛らしくてならない。長い睫毛をした目元のやさしい百合若は、半九郎の前にすわつてから、小さな鼻を仰向け、ふ、ふ、とおもいだし笑いをした。

「なんじゃな」

「いえね、先刻から父上はまだ戻られぬかと、そればかり申しまして。ね、百合若」

「そうか。おなかが空いて待ち遠しかったのじゃな」

半九郎はそう言い、百合若に手をひっぱられるまま、どこか物憂げに立ち上つた。

台所の板間につづく小屋敷は灯も明るく、物の匂いや湯気がむっとするほど暖かにたちこめていた。今夜は魚もついた夕食

の膳に、父子はならんで箸をとった。

食事はいつももの静かである。終り近く、半九郎は給仕するもとに茶碗をさしだしながら、たずねた、「これで、何杯目じゃ」。百合若にばかり気をとられていたもとは、その言葉をきくと、美しい顔に照れ隠しの微笑をうかべた。

「わたくしは、つい、うっかりしておりました」

「そちはいつも、つい、うっかりする。もっとしっかり勘定せぬか」

「と申して、わたくしがいちいち数えずとも、お腹工合でわかりましように。御飯の数などにも、決めて食べることもありませんまいに」

「腹はただの容れ物。満腹した、ひもじいなど、容れ物の申すことはあてにはならぬ。それゆえ、日頃からそちに勘定をたのんでおる」

台所の板間にいたひさは祖母と目配せして微笑し、年をとると他愛もないことで口喧嘩なされる、とおかしかった。

もとはいつも御飯勘定を忘れ、それをまた正直に申しでて、いつも半九郎の小言を食うのであったが、そのとき、彼女はおっとり静かに揶揄するような口調で、日頃の観察を口に出した。

「ほんに不自由な……、お前さまは何であれ、異を立てるのが好きなお人でありますのう」

小座敷の気配が変わったのは、その直後である。

暖かく穏やかだった空気がみるみる凍りつき、ばりばりっと音を立てて亀裂が走り、やがてみじんに砕けた。額に蒼筋をたてて硬直していた半九郎は、二度、三度、烈しく咽喉仏を上下させ、「なにっ！ そちごときにそのような……」、あとは喘いで言葉もなく、箸をまっぶたつに折って膳に叩きつけた。

はじめてみる半九郎の激昂であった。ひさはすぐ気を取り直し、呆然としているもとに「早う、お詫びを」と促したが、もう手おくれであった。半九郎の膳は倒れ、皿小鉢がとび、百合若がわっと泣きだすなか、半九郎は席を蹴って立ちあがった。怒りにまかせ、大股に二歩、三歩あるいた彼は、そこで突然、足が萎えたように、ふらふらと崩れこんだ。走りよったひさ

は、扶けおこそうとして、息をつめた。灯影になった畳のうえに、音もなく這いだしてくる黒いものがある。震えながら目を凝らすと、うつぶせになった半九郎の口から、夥しい吐瀉物が流れだしているのであった。

「お父さま……」

ひさは、悲鳴にちかい声をあげた。

「しずかに」

制めたのは、祖母である。

「動かしてはならぬ。そのまま、そっとじゃ」

かかりつけの医師は、遠藤春台といった。

御典医で、児玉の遠縁にあたる。

春台は、軒のような荒い呼吸をつづける半九郎を一目みるなり眉をひそめ、様子をみましたうえで、と何の手当も施さなかった。

春台が去ると、半九郎の顔は急に、「死」に濃く隈取りされたようにみえた。

風が出て、障子がふっとふくらみ、はたはたと鳴り、うそ寒い風が家の中をかけぬけた。同時に裏庭でも、ざあっと時ならぬ叫喚があがる。横本丁一万坪の区劃は、通路沿いに四方から十軒ほどの邸で取ってゆき、真中に残った二千五百坪を余地として、防火その他の用に竹藪のまま放置してある。そこに群生した天を突くほどの竹幹は、風のたびいっせいに悍馬のように梢を振り、右に左に身をよじっては植物ともおもえぬ唸りをあげる。「あねさま……」、ひしと寄り添ってきた妹ののぶの手を握りしめながら、ひさは自分の掌が冷えきっているのを知った。

春台を送っていった松蔵がもどり、今日、蔵本からの帰り道、半九郎が眩暈をおこし、彼のさしだす手をしっかり掴んで耐えた、と告げた。

「お父さまが、めまいを……」

おどろくひさに、松蔵は意外な表情をみせ、

「眩暈は夏以来のことでありませう、ご存知じゃ、とばかりおもつていましたが。旦那様は相州のことをそれは気に病んでおいでましたげえ」

と、庭先からひさをみあげた。

はじめて聞く事実であった。

ひさはぼんやりして返事も忘れていた。

家中では、児玉のひささまはしっかりした娘御、と評判であった。遊芸好きの気儘な母に代って家事をとりしきり、弟妹に読み書きをみてやり、裁縫も機織りもなにをさせても人並以上との評価を、ひさは当然のように受けとり、それにふさわしく振る舞ってきた。半九郎がひさを頼みとすればするだけ、ひさも半九郎に尽してきた、と、疑わなかった。

だが、ひさは半九郎のなにを知っていたら。影の形に添うように供をする松蔵には早くから、半九郎の「心」がわかっていたというのに。家族は誰も、半九郎をただ謹厳で几帳面すぎるほど几帳面で口やかましい父親としてみるばかりで、生身の半九郎の心の中を覗こうともしなかった……。

もしかしたら、とひさは身震いしながら思い当っていた、「お父さまは、この女子供ばかりの家庭にあって、誰に心の中を打ちあけるでもなく、詩にたとえようもなく孤独でいらしたのではないだろうか」。

病室にもどったひさは、物言えぬ半九郎をふかい眼差しで見守った。この後悔をどんなにもして償いたい、どうぞお治りになりますように、とひさは懸命に祈ったが、隙間風がはしからひさの祈りを吹き散らしていった。

長い夜がようやく明けた。

報せをうけた親類の老人たちが集まってきた。もとは「いづれ、馬廻組頭さまや他の方々のお見舞いもありましょうから、ここではあまりに」といって、半九郎を夜具ごと表座敷に移した。

だが、なぜか、訪れる人はなかった。

それから三日の間に、わずか三人の見舞いがあつたきりだった。

浅見栄三郎。

栄三郎と同道した、義弟の浅見修次。

林麓。

三人とも、半九郎とはおなじ詩文会の仲間で、かねて親しい間柄である。

「格別にお大事になされよ」

林麓がそういつて深夜の月夜の道をかえつてゆくと、見送っていたもとは声を押し殺して、「ひさ」と呼んだ。

「なして、どなたも夜更けに人目を憚つてお見舞いにみえるのであらう。ひさ、これは、謹慎中の者にするお見舞いではないか」

もしかすると半九郎は大それたことをしたのではないか、いや、きっとそうじゃ、親類の方々の様子もどこかいつもと違ふ……と、もとはひさの打ち消しも耳に入らぬふうになり、目を据え、後れ毛が口の端に挟まっているのも気付かず、唇をこまかく顫わせて、気が元ぶつたさまで言った。

「明日にもお咎めがあるかもしれない。半九郎どのは若いころから二言目には、正義のためにはこの兎玉の家一つ潰れようと、それがなんじゃ、と広言なされたものであったが、最期になつてそれをやつてのけられたのにちがいない。ひさ、お咎めとなればこの邸は召しあげ、僅かな捨扶持をもううて路頭に迷うのですぞ。それを、それを、あの方はようも酷い仕打をなされた。そういうお方なのじゃ、もう顔も見とうない、看病など真つ平じゃ」と言い募り、足音もあらく奥座敷へひきとってしまつた。

もとの言葉には夫婦の隠れた葛藤があまりに露わに出ていた、いったんは廊下の端まであとを追つていったひさであったが、こみあげる想いにそこで足を止めた。

庭は寒くてしらじらと明るかつた。初冬の満月が絵のように中空に懸っていた。だが、目を凝らしてみてもその月のなかに

は、温かい耳をもつ兎の戯れる姿も、匂いたかい桂の木もなく、青銅を磨きあげたような蒼い冷たい光がただ輝いているばかりであった。この夏、おなじこの廊下の端で、のぶや百合若とあんなに笑ったのはなんのことからだったかと、ひさは記憶を探るようあたりを見廻したが、すべて茫とかすんで思いだせず、昔からずっと笑いに溢れた楽しかった日々など一度もなかったような気がした。うつむいたとたん、着物の膝に音をたてて大きな涙の粒が落ちた。ひさはおどろいてそれを払いのけたが、次の瞬間、両手で顔を覆うていた。家族の誰にも見せたことのない涙が、あふれるように両手を浸した。噉りあげながらひさは、さきほどの林様のお話は自分ひとりの胸にたたんでおこう、と決心していた。

#### 四

林麓。

号を芳雲という。国学者でまた北越流の兵法家でもある。年は半九郎より三才年長の四十九才、じつに気短な人であった。性急に案内を乞い、ひさをみると、淡い鶯色の疳癬な腫を注いで、いきなり問うた。

「で、容態は」

ひさが目を伏せると、

「そんなにわるいか……」

ええっ、と苛立った咳払いをすると、先に立ってずかずかと病室に通った。

半九郎はこの二日の間に眼窩は落ち凹み、土気色の顔をしてわずかに口を開いたさまは別人のようである。

もはや再起不能じゃ、と芳雲はみやった。

この春、富山源次郎に一代用人を外された彼は、今は藩政の外にあり、外からみれば藩政の歪みは明瞭にみえて、彼と半九

郎とはいつか藩政改革を期す間柄となっていた。

だが、それには「時期」がある、と二人は話しあってきたものだったが、それを突如として半九郎は覆えしてしまった。あの日、半九郎乱心す、と家中を奔った噂はまことだったか。そして次の日には、半九郎、富山用人に刃傷すと尾鱗がつき、富山郎には先を争って人が見舞いにかけてつける有様であった。

別室に退いた芳雲は、ひさにいった。

「相州撤兵に関する半九郎どのの心労は、まことに切なるものがあり、一昨日の会議では思いきった直言をなされて、つたえきいたわれらも溜飲を下げたものであったが、まさか、このような姿になられようとは、のう」  
それをきいて、ひさは居住いを正した。

「あの日、上御用所の会議で、父上はなにを富山用人様に申しあげたのでございましょうか」

「それを聞いて、なんとされる」

芳雲は淡い蔦色の瞳でひさをじっとみた。

「あんなお姿になられた理由を知りたいのは、子として無理なお願いでございましょうか。いつか百合若が成人しました折に、話してやりたいのでございます」

ひさの小さな体には真剣勝負の気魄が溢れていた。気押された芳雲は我にもなく咳払いを重ね、かねて半九郎が事あるごとに、ひさと百合若が代っておればと繰り言をいったのに共感しながら、「上御用所の会議の内容はおよそ外部へ洩らすものではないが」といった。

「たつて、このことゆえ話すが、御政事向きのことには誰しも藩を思うてのことなれば、これによって構えて遺恨を残さぬよう、よいな」

事のおこりは、相州警衛。

相州を守るとはすなわち、幕府のお膝元たる江戸を、夷狄の手から守ること。

ペロリが（と、芳雲は発音した）浦賀沖に黒船を率いてあらわれ、日本中を震撼させてより、海防意識は澎湃とたかまった。幕府の命令をうけた宗藩もただちに準備に着手し、ペロリ来航の半歳のちの嘉永六年十一月には警衛についた。幕府からお預り地は、西浦賀から腰越八王子山にいたる西南海岸の六十九カ村。警衛といっても、海防するのみでなく民政も一任され、小なりといえども現地に行政機関もおくのであるから、多大の出費を伴うものであった。

はたして、翌安政元年早々、徳山は他の支藩とともに、「一部を分担警衛せよ」との宗藩の申し渡しをうけとった。しかもそれは、宗藩のいつものやりくちである「すでにこの件については、幕府の許可をとりつけてある」との、有無をいわせぬ通達であった。

海防は必須のこと。

さりとて警衛費をいかに捻出するか。

しかも徳山は前年、早に見舞われて収穫皆無である。

遠い西国の一小藩に、黒船の忌わしい影が覆いかぶさってきたのは、まさにこの瞬間からであった。

もちろん出兵の代償はあった。江戸における火の番、門の番などの課役免除はあるが、そんな目先の少利に見合う負担でないことは、予想よりはよい宗藩の通達が雄弁に語っている、と、当時の評定役であった半九郎どのはじめ、われら重役はあげて出兵反対した。

そこで福間式部どのは萩におもむき、虎の前にひれ伏すようにして出兵辞退を懇願したが、「他の支藩ともふりあいのあることなれば」と撥ねつけられ、「では、早損の癒えるまで、せめて一年の猶予を」と乞うて、それも「早損は防長全土のこと」と、ゆるされなかった。長府や清末など、他の支藩には、馬関港からあがる莫大な利権があるが、徳山にはそんな天与の財源はなにも一つない、と知りつつ、哀訴、かけひき、いずれにも耳をかさぬ宗藩であった。

昨年春、五十六名の兵が「攘夷の氣勢にもえて」出陣していった実情は、ほぼ、そんな困難を押しつものであった。

述べながら芳雲は、当時の上御用所の悲壮な空気をおもいだしていた。萩からかえってきた福間の爺い、徳山にばかり

き、つゝい。案の定であつたぞ」と、男泣きして訴えたものであつた。

かつて、開府してまもなく、徳山は度重なる宗藩の横暴に堪えかね、ことの起りは、宗藩領の百姓がまたも徳山領の松の枝二本を盗伐したのであつたが、そのたった二本に意地を貫き通して、ついに抜き打ちに取り潰された苦い記憶があつた。しかも宗藩は、いわば身内の恥を幕府へ訴えて、幕府の力をかりて始末したのであつた。この城下が宗藩の兵の手によって、鳶口叩きこみ繩かけて曳きたおし、一夜にして瓦礫の野と化した無念さは、ながく徳山に伝わつたわり、こうして事あるごとに無念が噴きだしてくるのである。

このときも、では孫子の代まで借銀まぶれになつても出兵してみせようぞ、と、徳山は宗藩への意地をみせたのであつた。徳山への割り当て地は、大浦山一帯。

長府藩兵と共同で陣屋を使用し、この大浦山に砲台を築く。

陣屋の修覆、武器そろえ、砲台工事など、安政二年度の出費は二千両をこえた。今年になつてから大型出費といつてないもの、兵たちの衣銀菜銀ふくめ、半月に四十両、年間にしてはば千両、「箆に水をそそぐ如く」である。

こうした会計報告を半九郎どのおてよこす責任者の、「砲台監察方」兼崎昌司はまた蘭学者でもあるところから、この防駐に甚だ不満であつた。武器といえは槍に弓、陣笠などを揃え、砲台といえは土塁を積んで旧式和砲をのせただけの代物、「これ、かの甲鉄艦が討てましようや、まことに恐れ入り候攘夷にて」、せめて宗藩なみに武備を近代化するか、さもなければ、かような児戯にひとしい防駐から一日も早く撤兵すべきである、と、彼は報告書のため半九郎どのに訴えて憚らなかつた。

すでに幕府は、下田、函館の二港を開いてアメリカと修交条約を結んだが、阿部閣老に代つた堀田閣老はますます開国の方針に傾きつつあり、相州警衛は年を逐うてはじめの意義を失ひ、宙に浮いてきた。半九郎どのはこれにより相州は退くべきと唱え、他の支藩の同意を求めるとともに、宗藩にもこの意見を具申することしばしばであつた。

「半九郎どのは、今は上御用所の会議に連なる資格はないのだが、会議のたびに闖入しては撤兵案をもちだされた。あの日も、東評定役と冒頭から大激論となつた。ときいておる」

芳雲は淡々と当日の模様にふれていった。

東東馬評定役は、細面の、どことなし鶏をおもわせる眼をして「幕府の命もなきに白儘に撤兵できる道理はない」、と半九郎の案を一蹴した。

三人の家老は置き物のように坐って一語も発言せず、居並ぶ者も「異論」を唱えてやまぬ半九郎をもてあまし、もはや誰一人として半九郎に視線をむける者もなかった。

すると、上座のあたりで、ほ、ほ、と含み笑いがきこえた。

「兎玉どのは、異を立てるのがお好きな人じゃ。のう、御一回」

丸々と肥った、長州名産の大内人形を置いたような福相の富山用人がそういつて一座を見廻すと、居並ぶ者の上体がざわざわと揺れて、追従笑いが半九郎をつつんだ。

おのれ、人を晒むうさえあるに……、この瞬間、半九郎のあたまのなかでなにかが弾けとんでいた。

彼は一気に上座の用人の前まで膝行してゆくと、富山用人と東評定役を真向から見すえて、一息に述べた。

「なるほど御一統は永年、理財によるご奉公をもって功績があり、今日の徳山はご一統のご奉公によって露命をつないでいる。われらはそのご奉公をすべてはおもわぬが、仮にゆずって財政第一としてみてもじゃ、今の徳山には、一に無益な相州防駐があり、二に後宮の濫費があり、加えて重役ご一同にかよう意識の弛緩もあり、これでもご奉公相立ち申すといわれるか。近年、藩政長くご一統に私され、人事の専横、猟官の横行、賄賂の弊風など目に余るものあり、下僚を死に至らしめながら怙然と君側をふさぐ。これでも徳山は平穩無事、われらのみが異を立てると申されるのであるか。じつにご一統の所行、徳山の藩と士民を亡ぼすものである」

畳を叩いて罵ると、一座は総立ちとなり、名指された富山用人もさすがに色をなして激論ののち、「問答無用」と席を立った。それへなおも半九郎は、「待たれえ」と追いますがって用人の袴裾をつかんだ。数人が半九郎を制めた。もがく半九郎の肩先を、「ええい」と用人は手にした扇で発止と打ち、足音もあらく広間を去っていった。

半九郎の意識はもどらず、十九日の暁となった。障子を細目にひらくと、冷たい外気が白くながれこんできた。新鮮な夜明けの匂いがある。百舌が続けさまにするどく啼いていた。半九郎の虚ろな眼は暁闇の彼方をみているようである。ご最期じゃ、とひさは胸にひびくように知った。

百合若を起きねばならなかった。その間にも半九郎は息絶えるかもしれないが、侍は婦人に看取られて死ぬものではなかった。ひさは短いためらしいのち、すぐそこを離れた。百合若を枕頭に坐らせたとき、半九郎の表情はすでに幽界のものに変っていた。

闇は刻々に薄れ、代って大いなるものの氣息が充ちようとして空の底には仄紅さが動いてきていた。半九郎の顔からしだいに「生」の名残りの時が消えてゆく。ひさの目には、色褪せた半九郎の唇が、「ひさ、なんとしても百合若を……」と、訴えつづけているようにみえた。

## 五

半九郎倒ると聞いた日、すでに、親類の老人たちは感情のこもらぬ冷静な口調で話しあった。

「医師の春台も、治れば奇蹟、とゆうておる。万一治ったとしても、廃人同様」

「でのうても、あの騒ぎじゃ。早急に隠居を願いでて、養子に跡をゆずったほうが重役のうけもよい、とゆうものじゃ。半九郎はひさを嫁に出すのが惜しうて一日延ばしに渋っておったが、それが不幸中の幸いであつた」

「誰ぞ、年の釣りあう次男とゆうて居ったか。ここは仲継ぎゆえ、選り好みはできぬ」

「なんの、低目に声をかければ欣然と養子に来よう」

では、誰ぞ。

その人選は、半九郎の棺にしたがって東川ひがしを溯り、ぼうぼうと枯芒の靡き伏す福田寺原ふくだんじはらをぬけて上流の福田寺ふくだんじに埋葬をおえたあと、にわかに切実となった。

それが決まらぬうちは、半九郎の喪は公表できない。武士が禄をもらうのは君公の馬前で死ぬため、ゆえに長子幼少にして物の役にたためるときは家禄は没収される。急ぎひさに婿をとり、半九郎の跡目を立てようとするのである。

馬廻組同士の縁組は禁じられているが、組が違えば目こぼしもあり、大方の意見は中小姓わたくらをしている梅地わたくらに絞られてきたが、誰かのいった「あの馬鹿息子をか」の一言で、それも消えてしまった。

そのうち、「あれは、誰じゃ」と、塩川順蔵という老人が傍の老人をふりかえった。さきほど、東川のほとりで頬冠りをとって棺を送した体軀長大の若者がいたが、鋭い目は鷹に似ていかにも為すある若者とみえた……。

だが、誰もそんな偉丈夫に会った記憶はなかった。しかし、図体の大きいといえ、一刀流指南役・浅見栄三郎の倅ではないか。

「浅見の倅、おう、大島流の槍術指南をしている眉目秀麗の者か」

いや、それは長男の安之丞だが、そっちの方でなく、いつも友人二人を従えて歩いている次男のほう、

「はれ、試胆会したんかいのとき、立入禁制のお館の裏山へ入り松の木をひきぬいて持ちかえった暴れ者じゃ。栄三郎が仰天して、三日も謹慎したではないか」

「……うむ、いた。で、それはどういう倅じゃ」

それが、とその老人が言い激むと、とたんに「うどの大木か」と声があった。

長州人は、ことに山陽道に面した地方の人は、ときにじつに端的な表現をする癖がある。

「いや、愚鈍ではない、が評しようもまた無い。これは賭じゃ。茫洋として一見、未完の利器を彷彿させるが、あるいは見かけ倒しに終るかもしれぬ」

将来、大器となるか、見かけ倒しに終るか、きわめて危ふい賭であったが、塩川老人には関くものがあつた。彼は「ええい、

この際じゃ」といった。

すぐにひさを呼ぶ。

一方で、松蔵を浅見家に走らせた。

話は手間どらなかつた。

栄三郎が児玉家を出たのは薄暮のころ、格子門をひいた彼は、門前の溝にかかる花崗岩のふみわたしに正しく片足をのせて、横本丁の道に出た。この年、栄三郎は五十六才、頭は真白になっているが、頑丈な体軀はいささかも衰えをみせない。

横本丁を東にゆき、東本丁を南に下る。五十石を頂戴する土の邸は、横本丁から南に位置する五千坪の区劃が三つ並ぶなかにほぼ納まっている。栄三郎の邸は東本丁に面する東向き、表十七間入二十間、生垣に白い山茶花の花がぼうと浮びあがっている門前で、栄三郎の足はしげんに止まった。栄三郎は我にかえて門を入った。

式台の前には客の履き物があつた。

客か……と栄三郎はすこし煩わしくおもつた。浅見家では、栄三郎と妻はなともに温かな人柄から、さながら若者の溜り場になつていて、長男安之丞、次男厳之丞の友人たちが誰彼となし出入し、議論や談笑の聲がたえない。栄三郎は、穿きくせ悪く片方にちびた、いかにも武の嗜みのない下駄を見下すうち、今夜は安之丞の友人、江村彦之進の送別会の日であつた、とおもいだした。

そのとき、門からとびこんできた厳之丞が彦之進の下駄を見るなり、

「あつ、もう来ておられる。父上、江村どのがもう来ておられますぞ」

栄三郎の袖をひいて注意を喚起し、一大事でもおこつたように井戸端めがけて一目散に足を洗ぎにいった。

十七才とおもえぬ堂々とした体軀、袖は肘のあたりまでしかなく、腹囲も袴の紐がまわらぬほど太い。しかし、その巨軀の上には尻切れとんぼの太い眉をもつ、まだあどけないといつていいような稚氣を脱しない顔のついで、厳之丞は一口でな、と評しがたい模倣とした塊りであつた。

秀才の彦之進を畏敬している彼は、いそいそと座敷に入り、彦之進の前に体を縮めて坐ると、いった。

「江戸、安積良斎塾入塾のこと、大慶であります」

彦之進はじろりと厳之丞をみた。極端に無口の彼は、「一見異常之士」と評される蒼味がかつた暗い眼光で、相手の心中隈なく見透すような凝視を注ぎ、厳之丞が居心地わるくなったところ、

「良斎は俗物じゃ、と罵った者もいる」

「……は」

「ともかく、兄上とおなじく年十五両ご下賜にあずかる」

と、飛躍した答えをした。

江戸留学は大慶かどうかわからぬ。しかし教授は自分が国許にいるのを嫌うゆえ、田舎塾にとばされるよりは江戸へゆく。安積塾は朱子学を学ぶ天下の秀才が蟬集するところではあるが、行く以上、自分は必ず衆に擢んでるであろう。たった二言の背景は、それほど自信にみちたものであった。

江村三兄弟といえは文学拔群とおなじ語であり、長兄の純一郎、本城教授の養子となっていま安積塾で塾長をしている次兄の清、一人欠けて四男の彦之進ともそれぞれに秀才揃いであった。ことに彦之進は「接人直言不忌」、その烈しい性格から「文を属し詩を賦す 数千言立ち所に成る」をはじめ、すさまじい勉学ぶりを示す無数の評や逸話に飾られていた。机の前の畳が正座した足の形なりに凹んでいる、というのも、その一つである。

客が揃い、はなが酒肴を運んできた。

各自に硯箱が配られ、それぞれに餞けの詩をしたためる。厳之丞も詩箋をとった。

今日送君魂欲飛

啼鳥有情憐別恨

きちんと楷書で、自信満々しるしてゆくの横目でみた栄三郎は、そこに溢れかえる青臭さにあてられ、転句はおおかた紅

葉でも飛ばすつもりであろう。なりは大きうてもまだ子供じゃ。それが養子、しかも自分とおなじ「仲継ぎ」に所望されるとは……と、さっきからの屈託にひきもどされた。次男が百石取りの家に所望されるのは光栄のかぎりではあるが、ではあるが、と、彼の想いは低迷している。昏れた庭のたたずまいは四十年前とさして変わらさず、彼の瞳には、あの日に縁側に堆く積まれて初秋の暑い陽に燃えていた曼珠沙華の花の紅さがみえた。

「お前は今日から、東本丁の浅見の跡へゆく」

と、父親が申しわたしたのは、年も敵之丞とおなじ十七才のときであった。

行ってみると、曼珠沙華の花の映りで真赤な頬をした女の子が、蜂蜜色に陽灼けたむきだしの膝小僧をみせて真座にすわり、彼をみると、ままごとのお客がきた、とばかり、ニコニコして「いらっしやいませ」と廻らぬ舌でいった。

それをみたあなた、彼はおもわずも父親の袖をひいて口籠っていた。

「あれか。あれが……まさか」

すると父親は厳めしくも重々しくうなずいて、いった。

「そうじゃ、十年たてば立派な嫁女じゃ」

む、む、と、彼の頭の芯はかっと燃えた。

火団のような花の反射も眩しくてしきりに瞬きを重ねながら、次男の兄をさしおいて三男の彼が養子にえらばれたのは、將來を囑望されたからでもなんでもなく、「非常に単純な理由」に他ならなかったのだと、彼はふわふわと意気込みが萎んでゆくを感じていた。

「兄さま、だっこ」「しっこ」「おんぶ」と纏わりつくうち、大柄で従順な瞳を持つはなは、夏の宵にしずかに蕾がほどけてゆく夕顔の花のように成人し、二年間の江戸詰めから帰るたびに彼をおどろかせた。

しかし、手をふればはなは子を成す。

忘れていた「仲継ぎ」の重味がぬつと頭上にかぶさってきたのは、はなとの交りのあとであった。子を成せば子への愛にひ

かされて筋道をふみ外すやもしれぬ、この家督は、本来、はなの弟、修次のものであった。

栄次郎は修次に家督をゆずろうとしたが、「兄さまは同じ浅見から来られたお方ゆえ、どちらが立ってもおなじこと」と修次は受けず、ついに藩に処置を委ねたところ、藩は、彼栄三郎に相続をゆるしてこれは藩内の美談となっているが、しかしであった、はなの父はどれほど修次に跡をつがせたかとおもうと、四十になっても部屋住みの修次に負い目をかんにて熄む時がない。

わずかな禄米をめぐる美談の内側には複雑な息苦しさもある。そしてそれもこれも、「仲継ぎ」ゆえの苦渋であった。また、「仲継ぎ」の在り方も個々様々。

児玉では厳然として、百合若の元服まで、厳之丞を所望する。いいかえれば、百合若の成人したあと、厳之丞はひさとの間にできた子ともども、百合若の「厄介」になって、あたら長い一生をおえるのであった。

児玉へやるべきか、

より広い天地に放つか、

厳之丞の将来をおもって、栄三郎の決心はまとまらなかった。

翌朝、彼は厳之丞をよんだ。

のそりと敷居際に立っているのに、「坐らぬか」と命じると、いきなり、どすっと坐った。栄三郎は苦い顔になり、養子の件をあらましつつえた。

「わしを……のう」

厳之丞は茫洋とした表情を動かすでもなかった。

人は未完の法器などと追従をいうてくれるが、まことに少々叩いたぐらいでは響きもせぬ、と栄三郎はもどかしげに重ねていった。

「そちは、仲継ぎに望まれておる」

嚴之丞が黙っていたのは、いまにこのせせこましい徳山を出て行ってやるとの計画が狂った狼狽のせいもあったが、父親の語気にひそむある、不明瞭さを直感したためであった。ふだんの父なら命令形で話すはず、彼にとって仲継ぎ云々は問題でなく、要するに、父は自分を他家に出したいのであるか、出したくないのであるか。

男の会話は片言すべて白刃のやりとり、ここは返答次第じゃ、と彼はやおらすどく父親をみつめた。

「で、父上はなんと」

「む」

自分の轍をふませるのは不慥で、などとは口が裂けても榮三郎はいわない。

「……考えてみます、というてきた」

だが嚴之丞は、榮三郎の常にもない一瞬の怯みを見逃さず、即座に、おう、五十石ではわしまで食べぬということか、と解釈し、では話はすんだとばかりに立ちかけた。

すると、さっきから二人の傍で前掛をにぎりしめていたはなが、

「気が進みませぬ。児玉のひささまは嚴之丞の齒の立つ娘御ではありません。おなじ養子に出すなら、もっと粗末な家柄でも、もっとありきたりの娘御でもよろしうあります、嚴之丞には嚴之丞に縋ってくらすような優しい娘御を添わせてやりたい。この子は野育ちの頑固な子であります、本当は兄弟の誰よりも親思いの、気持のこまやかな子で、わたくしは……わたくしは……」

言うち胸がつまって、はなは前掛を顔におしあてて啜りあげた。

日頃はなんであれ、「兄さま、兄さま」と安之丞を立てるはなであり、末っ子の端はじめをよぶとき声まで甘くなるはなであったが、この瞬間の嚴之丞にとって、それらはすべて眼中になかった。頬を紅潮させた彼は、今のはなの言葉をしっかりと内懐に入れて「最上の餞けをもうた」と、おもった。

よく思索するがよい、といわれた彼の行先は、いつもの納屋である。米搗台にあがった彼は、心にかかる、かるくと唱えな

がら、単調な足踏みをくりかえす。でないと、彼の体重では米が砕けてしまう。栄三郎の話半ばから、彼には、あれだ、と見当がついていた。

枯芒の靡く福田寺原を、蕭条と佻しい墨絵のようにすれちがっていった白い葬列。白い喪服の肩にも髪にも時雨の余滴を光らせ、うつむきがちに歩いてゆく美しい姉妹を、時雨が束の間描いた悲しみの幻かと心奪われて見送った彼であった。悲しみに沈む物しずかな娘の横顔を甦らせるにつれ、彼の心は吸い寄せられるように児玉へと動いた。

## 六

養子縁組は急を要したので、蔽之丞は身一つで児玉家へ入る。

その朝、栄三郎はじめて武骨な大きい手で蔽之丞の髪を束ねてやり、やがて、色褪せた黒い木綿の紋付羽織をきた蔽之丞を伴って、式台からおりた。

二人は廻り道をして蔵本の北へ出た。

蔵本から小高い丘にあるお館まで、まっすぐ三十五間巾のたてのぼり堅登の切り通しがのびている。そこは出陣に際して藩士の集合する広場、切り通しの両側は鬱蒼とした樹立で、いま樹々は梢をならしてさかんに葉を落し、落葉は風に煽られ風の形なりに広場の空白を舞いころがってゆく。

「冬じゃな、もう」

栄三郎のつぶやきに、

「物の象が明らかになる季節であります」

蔽之丞は見た通りをいった。

お館に頭を下げてから、二人は歩いた。

蔵本の門はまだ閉ざされていた。

鉄の鉾を打った左右の門扉にはそれぞれ「沢瀉おもたが」と「一文字三ツ星」の表裏の紋章が打ってある。支藩である徳山は当然、萩の宗藩とおなじ紋章を使用する。磨きあげた青銅製の紋章の輝きは、厳之丞になぜとなく、徳山にひそかにつたわる言い伝えをおもいださせた。

「宗藩に事のおきるとき、それはかならず徳山に発する」  
事、とは、藩政改革である。

それから八年後に他ならぬ彼自身が「徳山騒動」の主役をつとめるとは夢にも知らず、厳之丞は朝の風に吹かれて急ぎ足にそこを通りすぎた。

児玉家の表座敷では、家族が待っていた。

幼い百合若を上座に、祖母、もと、ひさ、のぶと居流れるのに順に目を移し、なんと女ばかり、なんと人形のようにこ小さい、とおもいながら、厳之丞は大声で述べた。

「浅見厳之丞、今日からは、児玉次郎彦であります」  
やがて、父子は仏間へ導かれた。

仏間は長い廊下のつきあたり、児玉家はさすがに簡単ながら「表」と「奥」にわかれており、家族は日常、広い棟の「奥」で過す。

縁あって岳父となった半九郎の戒名は、

久遠院一乗実相 俗名 児玉半九郎

享年 四十六才

という。

合掌した父子はまたひさに導かれて表へかえった。ひさは言葉も足取りもきびきびしていて、枯芒の間を見え隠れして遠去かった白い喪服の娘の姿は、現実の色彩で加筆されるごと、すこしずつ違う印象に変わっていった。

盃事がすむと、栄三郎は去った。

三間続く表座敷にひとりとなった彼は、物音ひとつきこえない邸内の静寂にもどことなしひんやりした見事さが漂うのを、暖かで穏やかな浅見の空気とはじつに違うとかんじながら、半九郎の机にむかった。

兄玉家が目下なによりも必要とするのは、二枚の届、

一枚は 半九郎死去の届

他は 半九郎跡目相続願

今般 長女ひさの婚約者、浅見蔵之丞改め兄玉次郎彦、半九郎跡目相続するにつき許可ありたく 此段御届申上候  
日付は半九郎死去の十月十九日に遡る。

きっちり楷書でかきあげると、早速、自身で蔵本に出しにゆく。

係の男は声もあげず、「そこへ」とわきの箱に顎をしゃくり、ここ七日ばかりの間に、兄玉と浅見両家におきた大きな境遇の変化と感情は、あっけないほど軽い紙音に化して、ほかの届と紛れてしまった。

さて、と見廻すと、蔵本はいつになくざわめいている。次郎彦は、お扶持米をもらう時季だったとおもいだし、今日からは藩内にも数少ない百石とりの身分となったが、では、百石とは実質いくらなのか、とざっと算用してみた。

通常、他の大藩は手取り四ツ（四割）ときくが、長州は辛く、徳山はさらに辛い。

平時は三ツ六歩のきまりだがそれは夢のような話、産米の大半が大坂御用達の借銀返済に消えてゆく近年では、二十五石以上の土は浮米法（浮米うきまいわたし、二九・四七）の適用をうけて、百石ではつまり、二十九石四斗七升。

ここからさらに、七十五石以上の土は、高禄税ともいふべき馳走米をさしひかれる。その割合は、五石懸りならば百石につきふつと六石、

ゆえに、

二十六石五斗六升余、

俵数にして六十俵四斗四合余、

これが百石の年間手取りのすべて、じつに二ツ六歩である。

しかもこの夏の早のため、藩は馳走米を一挙八石懸りにひきあげるといふ。重役連署して長い布告が貼りだされているのはそのためで、来年の参府も収穫皆無の理由から延期を願ひである有様、相州防駐費をかかえた徳山の財政はこの安政三年、苦境のどんぞこにあった。

侍のくらしは、この禄米を幾通かの米手形で分割拝受し、家族の年間の飯米（一人一日あたり三合）をわきへのけ、その残り分を、向こう一年間の現金支出と過去一年間の借銭の返済にあてる仕組みであるが、どの土も古借をかかえ、しかも出費はきりつめられないとあって、飯米をつめるほか、万般にわたって言語を絶した儉約をする。まず、やることは人の口減らし。彼のような冷飯食いはたちまちさで、だされる（放りだされる）のである。

「これも、つまりは、幕府の悪政の然らしむるところじゃ」

と、次郎彦は、禄米の軽さから想いを政治へとむけるのであった。

藩校からの帰り道は、井上唯一とつれだつて歩いた。

「今日、児玉へ入った。お前の邸の斜め向かいの児玉じゃ」

次郎彦の言葉に、色白で女のように優しい顔立ちをした唯一は、眉をひそめるようないつもの表情をして「おう」とだけいった。

二十五石で、しかも五男の唯一は、着替えもないほど貧しいので、余分の感情や言葉の持ち合わせもないのである。

唯一に別れて格子戸をあけたとたん、耳元でひびいた松蔵の「おかえりい」のふれに、彼はたじたじとなった。間髪をいれぬ早さでひさが姿をあらわした。頭を下げる横をそとすぎ、表座敷へ坐って一息入れた、とおもう間もなく障子がするする

とあいて、茶が出てきた。

夕餉は、半九郎の席にすわり、百合若とならんで一番に箸をとった。今朝までは、栄三郎と安之丞が食事をすませたあと、鍋底をかきまわして味噌汁の実を探した彼であったが、しかし、そんな感慨に耽っているひまもなかった、彼が茶碗に手をかけた瞬間、目の前に控えてまたたきもせず見守っていたひさの赤い袖裏がぱっと翻えり、目にもとまらぬ速さで給仕盆がさしだされる。そのたび、彼の腋の下では冷汗が滲んだり乾いたりした。

夜、蒲団にくるまってから、この表座敷まで漂ってくる髪油や化粧料などの女の匂いを嗅ぎながら、浅見の空気とはなんと違ふのだろうか、と吐息を洩らした。「この家では、なにごともおっとりと、ゆったりと、とはゆかぬ。すべてこれ、真剣勝負の間合い」と、呟き、長旅でもしたようにくたびれはてている自分を感じた。そのくせ彼はなかなか眠れない、じつは空腹のせいであったが、それには気付かず、彼は無理矢理、瞼を合せた。瞼の裏の仄明るい闇に真剣そのもののひさの表情が浮び、枯芒の原でみた白い喪服の娘の悲しげに儂げな顔はそのむこうに淡く薄れ、やがて、詩の世界へと歩み去ってしまった。

二、三日するうち、彼は親友の林佳蔵がなつかしくてたまらなくなった。佳蔵も、おなじ五十石を頂戴する兄・謹治の「厄介」になる次男で、幼いときから兄弟のように育ち、毎日のように往来して話の尽きない間柄だった。十一月に入った小春の日、病床にあった江村彦之進の父の状態が悪化し、彦之進の出立は延期、清も急ぎ江戸からかえってくるときいた二人は見舞いをすませたのち、どちらからともなく遠石の浜をめざした。

釣舟の櫓を操るのは、浅見の祖父の代から千吉という臍曲りの漁師である。いまは老いて手元もおぼつかない。海の紺があざやかに深まり、やがて藍一色のただなかに小舟が揺られるころには、目の前にくるぐると馬の背の形をした馬島が迫ってきた。そこは藩の流刑地として人の近付くのを禁じている島、千吉は小舟をゆっくり迂回させた。

すると、はるか沖合を東に向かってゆく船団がみえた。先頭の船には、一文字三ツ星の藩旗がはためいている。愉快にしゃべっていた二人は急に黙りこんだ。

「くそ面白うもないのう。あれをみる度、おれは肚が立って、いじらしうてならん」

と、佳蔵が横をむいた。

三田尻港から瀬戸内をさかのぼり、紀州沖から遠州灘と、はるばる外洋をまわって相州の地をめざす宗藩の輸送船団は、白帆を連ねて頼りなげに進んでゆく。

相州警衛に際し、幕吏にはおよそ外夷がわが邦を窺っている危機感などなく、事務処理は頑迷なまで「前例」にたよった。宗藩は「外様の毛利」の面目にかけて武備を近代化しようとしたが、井伊家からひきついだ旧式和砲を洋式大口径砲にかえたいと申請して、許可のおりたのは半歳のち、築くべき砲台地を選定して同意をえたのも数月のち、いずれも前例がなかったせいであった。

宗藩はその間に、まず大型船の建造許可をとりつけ、萩から船工を相州によびよせ、外洋の波浪にたえる船を建造し、完成すると、それを萩へ回航して大砲部品を相州に運び、現地で組みたてた。また湾岸用大口径砲は、萩から鑄工をよんで江戸で鑄造させる。こんな煩雜きわまりない方策はまだしも出費の面からすれば最上の策であり、小銃弾薬のたぐいもおなじ理由から、千人の兵の糧食軍装とともに蟻の這うように営々と海上を運ぶ。

いわば相州警衛は、あげてこの困難な海上輸送一つにかかっていたが、幕府にしてみれば江戸のすぐそばで着々と「軍備」が整ってゆく光景は、他藩がなにもしなただけ異様にうつるらしく、掣肘はしだいに露骨になっていった。「藩旗あるときは無検査で浦賀の関所を通す」との確約をとりつけたのはほんの少し前で、それまでは、目録と積み荷のわずかな差を楯に、せつかく辿りついた船団を二カ月も浦賀に足止めすること屢々であった。

「外様の毛利に対する悪意じゃ。今にみておれ。おい、酒じゃ。酒はまだ爛できんのか」

慷慨家の佳蔵は声を荒げて千吉にどなった。

コンロに火を起し、利き酒もやった千吉はしだいに機嫌よく饒舌にもなってきた。「そういえば」と、佳蔵に熱爛の湯呑をわたしていった。

「このところ、納戸役の熊谷様を久しう見んが、お役替えになったかのう」

「熊谷……主税か。あれはもう、死んだ」

「死んだあ。なして、あねえなええお方が死んだじゃろう」

「おれが知るか、自害するからには、それなりの理由があったんだろう」

ふうん、と千吉は眼尻のたれた猿みたいに真赤になった顔をうつむけ、藩の御用船が大坂むけ出港するたび、国治の手代と酒の積みこみの指図をしていたのに、片方が切腹で片方が御用達とは、割りのあわぬ話だと、ぶつぶつ言った。

「国広屋は御用達になったのか」

「このまえ振舞酒が出た。けど、ありゃ甘口で女子の飲む酒じゃ。店はひろげる、遠石に寮はたてる、それが東東馬さまの邸に劣らず贅沢三昧なつくりで、襖の引手は銀で、屋根は銅ちゅうよ。いまにお部屋様を招ぶじゃろう」

「む、だいぶん撒いたな」

撒いたともよ、しゃべりながら千吉は二人の竿から魚を外しては、海水で洗って器用に料理してゆく。

「で、敵之丞。居心地はどうじゃ」

佳蔵は声まで慎重に、次郎彦を正視しないように竿の先ばかりに視線を集めて切りだした。だが、佳蔵と一緒にいてしゃべるのを聞くだけで愉快でならない次郎彦は、何も気付かず、

「おう、なんもかんも、これが浅見と正反対でな」

「そうじゃろうのう。お前の母上も案じておられた。だがな、敵之丞。どこのばあさまでもやにこいものよ、お前は理窟が多いからいちいち癪にさわるだろうが、相手は女子じゃ、承知承知とゆうて、当分は借りてきた猫でゆけよ」

ねこ……と次郎彦は、手にした熱燗の湯呑と佳蔵の横顔とを見くらべた。一升買ってくれてしきりに釣りに誘ったのは、慰めてくれるつもりだったのか。友情に篤い佳蔵は、またかなり慌て者でもあった。

「あの、なあ、佳蔵。猫じゃない、虎だ」

「うん……」

「騎虎の勢いでとびこんでみたら、そこはお花畑で百花繚乱。案ずるな、鄭重にもてなされておる」

羨ましがらせるために誇張してみせると、その答に抑えていた酒気が一気に噴いてきたのか、佳蔵の赧ら顔は見苦しいまでに赤黒くなった。

「早ういわぬか、それを。で、で、ひさどのはどうじゃな」

いわれて次郎彦は考えた。婚約して嫁もおなじのひさだが、父と幼い弟以外に男の存在を知らぬ彼女の態度には、仕えると働わるの中間に似た不透明な部分があるのが、男の本能で知れる。

「ひさどのは……よめというより、あねという気もするのじゃが」

ひさどの、ときいて佳蔵と千吉はおもわず笑いだした。佳蔵はその表現に次郎彦の気怏れがみえ、夫婦になったときの次郎彦の珍妙なきこちなさを想像して、ますます無遠慮に笑った。次郎彦は存分に笑われたのち、悠然と微笑した。

「花の褥で十年の夢をみるのも果報じゃ。まあ、良かろう」  
む、と佳蔵の笑いが硬張った。

いつの間にか海上は雲に翳り、冷たい西風が沖合から無数の小さな白い波頭を立ててくる。初冬の空は晴曇常ならない。冷飯食い仲間が、「おう、あの兄玉へいったか」と噂する口吻に、羨望だけでなく軽侮もちらつくのは「仲継ぎ」だから、栄三郎が彼に「幸いにも、敵之丞は、ふかくそれを考えてないようだが」と述懐したのも、それを指していた。だが、次郎彦は百も承知ではないか。

彼はもう、井上唯一も加えた冷飯食いの三人が集まっていつかは国事に奔走するのだと大言壮語していた身軽な彼ではない。この男は一足先に別の世界へ行ってしまったのだ、とひしと佳蔵は感じていた。

「まだ仕上がらんかのう。もう早うお寝み」

隣の寝所で、祖母の低い呟きが聞こえた。

ひさも縫物の手をやすめず低声で答えた。

「この袴ができれば、全部おしまいだ」

「ほんに大きい着物じゃからなあ。昔、わたくしの里の松岡家に四尺の着物をきた立派なご先祖がいられたが、次郎彦どのはそのお方より大きい。みればみるほどたのもしい。ほんに、よう、この家へ来てくださった……」

もう幾度となく繰り返かえした言葉をいい、また祖母は寝息ばかりとなった。

跡目相続の許可がおりると、相続廻礼といって挨拶まわりをするのだが、小柄な半九郎の衣類は何一つ役にたたず、次郎彦の紋服の粗末なのに眉をひそめたもとは、いそいで下帯から足袋、袴にいたるまで一揃いを新調することにした。ふだんは裕一枚仕立てるのに二日もいらぬひさであったが、次郎彦のばかりは縫っても縫っても繕っても繕らない。

灯をそばへ寄せ、固い袴地に一針ずつ刺しながら、ひさは、祖母が口にするといえは次郎彦のことばかり、のぶも、あれほど半九郎に愛された百合若さえも半九郎のことを忘れてしまったかのように、朝目覚めては「兄さまは今日も角力をとってくれるかのう」と目を輝かすさまを考えた。半九郎はもう日々忘れられてゆく人なのかと、ひさは針目が茫と滲むのをおぼえた。

さつきから聞こえていた水音がやんで、ぴしゃりと表の障子の閉る音がひびいた。この寒い夜更けに次郎彦は水を浴びていたのだらうか、とひさは驚ろいて表の方をみた。次郎彦のすることは意表を衝かれることばかりだった。彼が携えてきたのは、本や、無鉄砲な習慣だけでなく、若さそのものだった。

下駄を鳴らして夜昼かまわず多勢の若者が入りし、表で傍若無人な笑い声があがるたび、半九郎が支配していた冷やかな威厳と秩序はけしとび、代って押えようとしてもおさえきれぬ精気と活力にあふれ、郎は日に日に若返ってゆく。ひさ自身も

掃除するとき、弾みをつけては、たきをかけている自分におどろくことがある。

だが、廊下のつきあたりの仏間に籠っていたもとは、その水音も知らず、米手形を前にさっきから何刻坐りつづけていたか、それさえ覚えなかった。蔵本の使丁が米手形をとどけにきた今日の午後、検めてみて危うく口にするところであった、「これは、なにかの間違いではありませぬか」と。すると使丁は続けて「ご承知のようにこの夏の早で稲がこじけて、しかもうて……八石懸りでは、どちら様もご難儀であります」と、頭をさげた。

早……八石懸り、よりによってこの秋、そんな高率の馳走米が課せられるとは……、半九郎の葬い、養子縁組、跡目相続廻礼と、人の死はなんと高価につくものか。さすが気丈のもとも打ちのめされて、小さな仏間を埋める挨拶の品をながめた。

しだいに諸事簡略になる世の中とあって、いまは付け届けも年五回でよく、そしてそれは万事に質素な藩の気風としてほんの形ばかりでよいし正月は樽代百足、盆は素麺三十把、暮は緑酒二升、暑の入りに砂糖を曲物まげもの一箱、寒の入りに餅、としたもので、このほかは男子を儲けた家へ端午の節句に鯛か武者人形の一つも贈ればよいのだった。

けれども家柄再興や跡目相続はいわば一回きりの大事であり、もとは半九郎にお咎めがなかった感謝の気持もこめて、気張って白生地を誂えてしまったのである。その数は、三家老や九重役、馬廻組頭や同組の者など、洩れなく挨拶してまわるため、三十を越す。

もとは、これまで一度たりとも半九郎に暮らしの相談や愚痴をいったこともなく、それが侍の妻として奥の幸領だとおもい、その流儀で凌いでできた。だが今度ばかりは凌げるかどうか、考えれば考えるほど闇に果なく舞いこるがってゆく枯葉になったような不安を覚えて心細かった。これが寡婦の気持だろうかと彼女はおもった。

侍町の夜は静寂そのもので、ときに遠くで夜濯ぎでもするらしい車井戸の軋りが伝わるばかりであったが、今夜はそれもななく、どの邸の妻女も言葉少なく過すのをおもわせた。もとは深い夜の音をききながら、暗い室内をなにかに縋るように見廻した。

すると、おもいがけない声が聞こえた。

「だから、言わぬことではないわ。わしが日頃から儉約しんやくに儉約しんやくにとあれほど言うてきかせたに。そちにも困ったものよのう」  
そう言われると、もとの心の中で逆らいたくなるものがあった。

「とゆうて、お前様の葬式に相続、物入りの嵩むのは当り前ではありませぬか。なんの、費うてしもうたものを今更悔んでも始まりませぬ、それならそのようにくらすまでのことであります」

さあて、強がりを用いても今度ばかりはそう巧くはゆくまいで……そちは、いったい、どうするつもりかのう、仏壇の奥でとぎれとぎれに呟く半九郎の声音には、もとのかつて知らなかった劬りがあった。もとはわざと邪慳に仏壇の扉をしめていった。

「お前様がそんな所で心配なさらずともよろしうあります。万事は明日からのこととして、もう早う寝みなされ。蠟燭も安うはありませぬ。もう消しますぞ」

火の用心を確かめ、米手形を抽出にしまったもとは仏間を出た。廊下は暗く長く続いている。その暗闇に向ってしずしずと足をふみいれながら、明日から畠も掘げよう、足軽の妻女たちのように晒木綿の質織りもしよう、なんの、逆境になればなるほど強くなるのが長州の女子とされたものじゃ、と、もとはずいぶん明るい表情になっていた。

挨拶廻りは五日も要した。

順序も敵しくきまわって、家老宅、用心宅とつぎつぎにまわり、よろしく、よろしくと頭を下げる。

すべて終った日、次郎彦は庭へとびおり、鍬をふるって畠を藪際までひろげた。藪の竹を伐り、風呂場と納屋の壁を繕ろつた。粘土もこねて瓦のずれを直す。薪は力任せに叩き割って納屋の軒下に積む。

若い下男の五人も働いたようなこの有様に、もとはさすがに喜びを隠しきれず、

「家に若い男がいるということは、ほんに便利でたのもしうありますな」

縁側で糸繰り車をまわす祖母に話しかけると、

「少し前まではたしか、大飯食うわ、軽輩の件どもがぞろぞろ出入りするわ、児玉の家も落魄れたものよ、と難儀がっていたようにおもうけれど」

祖母は皮肉でもなく枯れた口吻で言った。

十二月、半九郎の忌明けの法要が営まれる日となった。

その朝、納戸に入って箆笥から家族の紋服をとりだしていたひさは、もとの烈しい語氣に顔をあげた。そんな上等を着せてやらぬでもよい、ともとは次郎彦の新調の紋服を指さしていた。

「では、旦那様だけこの粗末な方にするのでありますか。浅見様もみえますのに」

「それしか着せてよこさんなのじゃ、それでよい。それから、ひさ、わかつていようが、施主は百合若ですぞ」  
事もなげに言い、もとは氣忙しげに料理の指図をしに台所へと去っていった。

物心ついたころから、もとが第三者に「半九郎どのが」というその呼び方には、「養子に來られたお人」の含みがあつて、ひさはずっとこたわつてきたものだが、次郎彦に対してはその口吻がいっそう見下げた氣配を伴い、ときに下僕のようなようである。ひさは逆らわずに色褪せた黒い木綿の紋付羽織ととりかえたが、ともすれば半九郎と次郎彦との間で揺れていたひさの感情は、このとき音をたてて次郎彦の方に傾いていた。

精進料理の膳が出て、客がかえつてゆくころには雪となつた。栄三郎も席を立つた。式台で斑を撒いたように降りしきる牡丹雪をみあげた彼は、見送るひさの方に向き直つた。ゆくゆくは舅になる彼でも身分が下であるから、しぜん、ひさの方が挨拶をうける形となる。栄三郎はじつとひさをみつめ、

「あれは……敵之丞は、なにぶん、表現に拙ないところもございますれば」

口籠つて、あとは続かず、白髪のをふかく下げた。

栄三郎は歩きながら、襟に入る雪の冷たさも感じないほど心が冷えていた。法要の席で上座にちよこんと坐る百合若をみたときから、彼はもとの意図や次男が兒玉家であうけている待遇や、すべてを看とつたが、問題はそんなことでなく、あろうことか、当の次郎彦は読経の最中から傲然と懷手をし、会食の折には酩酊して体をゆすり前後不覚の体であつた……。隣席の塩川老人が話しかけるたび、栄三郎はどんな応答をしたか、その覚えもない。彼は息子を恥じ、己れを恥じ、せめてひさに訴えずにはいられなかつた。

灯をともしして台所の板の間に坐り、のぶや下女と洗った膳碗の艶拭きをしているひさの耳に、ごく微かな井戸の滑車の軋りがきこえた。さっきから三度目である。

「松蔵、おまえですか」

答えはなかった。ひさは声を高くした。

やがてのっそりと松蔵が戸口に立った。

「さっきから、何をしています」

「水を汲んでおるであります」

「なんのために」

「その、冷やしてみたら、とおもつて」

「なにを」

ひさが言葉少なくなればなるほど、語気は真剣になる。松蔵はついに観念したように入ってきた。

「腕であります」

「でもお前の腕はみたところ、どうもないではありませんか」

「わしでのうて、旦那様であります。隠しておいでるが、ひどく腫れて、熱も出ておいでます」

ひさは首を傾げ、松蔵の背後の煤けた梁に視線をやった。おもいあたったのは、栄三郎の去り際の暗い表情と謎のような一言であった。あれはただの挨拶ではなかった。手当もされず誰からも顧みられない我が子を他家にみて、栄三郎はどれほど心を傷めたことか。

「なして早うそれを申しませぬか。いくら無口とゆうてもお前はいつも肝腎なときにはなにもゆうてくれませぬ」

「じゃが、旦那様が隠しておいでる以上、わしも道場を覗いたとはとてもいえませぬ」

と、松蔵は無愛想にいった。

次郎彦は武術は剣技の稽古をとっているのだが、栄三郎は手を下さず、書生に稽古をつけるのはもっぱら師範代の谷速水が

あたる。この稽古日はまた、隣接する蔵本で上御用所の会議が行われる日でもあり、速水はそれを意識していちだんと気合を入れる。次郎彦は目の仇にされ、参った、と声をかけても、容赦なく叩きのめされる。

「谷様は性質のねじくれたお方で、外から見えん所ばかり狙うて叩くであります」

「なして谷様は、そんな卑怯をなさる」

気色ばんだひさを、松蔵はちらりと上目遣いにみて言い激んだ。

「なして、て、それが、そねみちゅうものでありましようい」

ひさは少し間を置いたのち、その意味を納得した。彼女は腕を拭いていた紅絹もみの布を放ると、表の廊下まで急ぎ足でかけていった。障子の内側で呻き声がやんだ。ひさは咄嗟に足をとめ、考えてから、声をかけずに台所までもどって松蔵をせきたてた、「すぐ外科の池田順京どののところへゆき、お薬をもらうのです。でも旦那様にはなにもいわず、お前の一存ということにして」。

翌朝、朝食のとき、ひさは湿布した次郎彦の腕に気付かぬふりを装って、伏目がちに給仕盆をさしだした、「もう一つ、お重ねなさいませ」。言われて彼もいつものように茶碗をそこへ置いた。痛む右手で、であった。甲まで紫色に腫れあがった手をみたとき、ひさははじめて、この茫洋と掴み所のない若者ながら、十七才の青年の裸の心がみえたような気がした。ひさはおもわず目をあげ、次郎彦の熱に潤んだ瞳をみつめた。次郎彦は一瞬動揺し、それからいつもと同じ素気なさで席を立った。彼が藩校に出かけたのち、ひさは昨日活けたばかりの法要のための活け花を捨て、簾際に咲く寒椿を彼の室に活けた。そうせずにはいらなかった。壺から延びる枝の線が動かしようのないぎりぎりの位置に納まったとき、ひさは満足して膝をずらせた。

「姉様のお花は、いつも隙がなさすぎて、近寄りたいたい感じをうけるけれど」

背後で水注みづしをもってきたのぶの声がした。

「今日のはふっくらして、とても優しいお花じゃ」

あとがき (秋原勝二)

吉浦摩耶先生 は当該表紙を満洲以来飾っている中尾彰画伯の夫人。同じく画業の真髓に迫る画家。昨年三月、東日本大震災の悲報を耳に眼にした翌日亡くなった。その姿を、同人渡辺利喜子が、みずからも先日の関東地方を急襲した台風並みの大暴風の街頭で腰骨を痛め入院中の病床から届けてくれた。余人には書けない一文となった。

『作文』第204集 は三人の同人が提出した作品のほか、西原和海、坂井信夫両氏の寄稿を得て、予定の30頁を越しているが、3年前に亡くなった同人吉田紗美子の中篇小説を連載することとしたので、二倍半の厚さになる。

西原和海氏の、古川賢一郎編著に寄せた

「貧しき化粧の少女たち」 は前集のために起稿されたものだが、完稿間際に急病で執筆不能となり、心労の中を今集になったもの。

吉田紗美子の生前の作品 平成21年10月に亡くなった同人吉田紗美子は、何冊もの小説

集を出せるのに、一冊も出していない。殊に昭和34年下半年第42回の芥川賞に候補作となった「感情のウエイヴ」(『素直』誌第8号所載)、昭和60年3月に放送文学賞を受賞した「沢瀉の紋章の影に」の二作は、作者畢生の作とみられる力作ながら読む機会がなかったところ、今回遺族の一人兼崎人士氏の手により後者が発見された。

吉田紗美子の作品には、大きく分けて「身辺もの」、「俳人もの」、「幕末長州藩もの」の三つの傾向がある。発見されたものは長州藩もの雄篇である。今集からそれを掲載することにした。40頁前後の連載で2、3年は必要だし非常に手もかかるが、その労を厭わぬ充実した力量。思いはただ一つ、公表して多くの人の眼にふれるよう、その下地を作る願である。目標がまた一つふえた。

隠れ蓑 一世紀前に天皇を隠れ蓑に国事を壟断して国民を敗戦のかなしみにおとしたのは軍部だといわれた。昨今は公約、国民のために、が隠れ蓑にされている。選挙時の公約に反するのは許せないと現政権を悩ませているグループがいる。国民がそう思っていると

か国民のためというので一見正論にみえるが、その公約は去年の東日本大災害以前のもの。筆舌を超える大地震、大津波、放射能害が住民を痛打しその生涯を根こそぎ破壊したのは、すでに戦争であり新時代を呼ぶ早鐘だ。公約もそのまま維持できないのは自明の理。選挙のやり直しもならない急迫事態。政党も自説を主張する暇があれば臨機応変、挙国一致内閣を組織してでも被災住民を救出すべき緊急事だ。こんなことわからないグループであるまい。それともわからないのか。古い切札をいつまでもふりまわして自分を守ることに汲々としているのか。それをそのまま報道するマスコミもコッケイ。それともバカバカしくてとぼけているのか。国民をいつまでもかなしませるな。正気になれ。

12012年5月30日

『作文』第203集正誤

P 16上段17行 咳xいては 咳xいて  
// 23 // 21行 買xせは 貸xせ

(作文同人)

名古屋 哲夫

〒六〇三―八二二五  
京都市北区紫野下門前町五

渡 辺 利喜子

〒一九〇―〇〇〇三  
立川市栄町一―二五―九

秋 原 勝 二

〒二四九―〇〇〇二  
逗子市山の根三―十一―二五 渡辺方

次 集

第二〇五集 原稿〆切日

平成二四年一〇月末日

(平成二五年一月一日発行予定)

作文第204集 (頒価一、〇〇〇円)

発行日 二〇二二年七月一日

編 集

秋 原 勝 二

発行人

発行所 (〒二四九―〇〇〇二)

逗子市山の根三―十一―二五 渡辺方

作 文 社

電話 〇四六―八七一一五七三―

振替口座

〇〇一九〇―九―六八九―三五

印刷所 (〒七〇三―八三三三)

岡山市中区高屋一―六―七

株式会社 三門印刷所

電話 〇八六―二七三―〇五五〇代